

故山崎林治先生を偲んで

柴田治（元信州大学理学部教授）

山崎林治先生は 104 歳という高齢で 2001 年 1 月 9 日にご逝去されました。まさに二世紀を生きられ、天寿を全うされました。

しかし、この間の先生を囲む事情は決して平穏ではありませんでした。奥様に先立たれ、晩年にはご長男夫婦を事故と病気で相次いで失われたため、男手で小さいお孫さんの世話をされ、大学卒業まで面倒をみておられました。それにも拘らず、いつも温和な表情で「生き物」、ことに植物と関わり続けてきた先生の強さには、事情を知る周囲の人々には実に驚嘆の限りでした。これには、常日頃から和歌をたしなまれていた先生の心の在り方や多くの生き物を通してみた死生観などと関係していたのかも知れません。この強さあるいは信念は、太平洋戦争末期に多くの人が黄土色の帽子（いわゆる戦闘帽）をかぶっているなかでも、先生は最後まで無帽で通されたことにあらわれているように思います。その理由について詳しくは語ってくれませんでした。

このような先生から生物を教えていただけるようになったのは、私が松本中学（現在の深志高校）へ入学してからでした。その教え方も可能な限り生きた教材を中心に、関連事項を発展させたやり方でしたので、これによって生徒個々の興味は大いに触発されたように思います。ことに、摘出したカエル心臓の拍動と生理的食塩水の循環を見ながらの心臓機能についての授業は、私にとって大きな驚きであり、いつまでも記憶に鮮やかです。

時間内の教示が不可能な時には、廊下の一角につくられた小さなガラス窓（室?）の中に展示して下さいました。それまで何も知らなかった私がヒカリゴケとマリモを初めて見、これらの培養方法を知ったのもこのガラス窓の中でした。授業中あるいはガラス窓に展示された資料は、すべて先生が採集されてきたものか、中庭の小さな畑で先生が育てられたもので、夏の暑い日にも無帽で多種類の植物の世話をしている姿をよくお見かけしたものでした。私は成人してから、先生が長年にわたり系統保存されていたタルホムギの種子を分けていただいたこともありました。

先生はたんなる自然愛好家ではなく、いつも生物への旺盛な知識欲をもたれていた在り様は、生命現象の不思議さに魅せられた学究者であったように思います。それが如実に現れたのが、同好の士による松本生物学・遺伝学談話会と長野県生物関係教員に呼びかけてつくられた信濃生物会の設立に、中心に関わっていたことでしょう。前者の会は、先生が旧制の松本高等学校宮地教授と片倉蚕業研究所福田博士の許を頻繁に尋ねて学んだことを、他の人も知ってほしいという願いから、事務のすべてを先生が負って始められたものでした。それも、ほとんどの人達が真実を学ぶことを忘れかけていた太平洋戦争の終戦 2 年前に。改めて、内に秘めた先生の強さが思いやられます。そして両会は、先生の意を体して地道な活動が現在に引きつがれていますが、その根底には「生き物」を愛した山崎先

生の心も脈々と伝えられております。

90歳を半ばになられても、いくつかの植物採集会に講師として頼まれて出席され、また生物学・遺伝学談話会の例会にも出席されておりましたが、その時にえた情報は必ずメモをしておられた先生のお姿には感動すらおぼえました。その頃の生物学・遺伝学談話会の例会の折に「ここまで（鷹匠町の自宅から旭町の信州大）歩いてくるのがだんだん大儀になってきたよ」と洩らされたことがあります。それでもなお、屋久島（ヤクスギ）へ、そして北海道（ケショウヤナギ）へと一向に衰えを知らない先生の前向きの姿勢には、ただ驚嘆するばかりでした。

自らの実践を通して教え、表だったことを好まずに陰からの支援を惜しまれなかった先生の生き様は、教育者として本当に貴重な

存在であり続けた生涯であったように思います。現在の殺ばつとした教育の場のなかで、生き物を見る先生の暖かな眼差しに学ぶところは多く、これを次世代に伝えていく責任は様々な場で先生に教えを受けた私達にあるように思います。

先生、本当に長い間お疲れさまでした。あの世にはまだ見ぬ花園があるといえます。暫くそこでお休みになられたら、またそこで調査を始めて下さい。後から行く私達にその成果をお聞かせくださることを楽しみにしています。